

## 7-2-2 淡水・汽水・海産貝類

### (1)現状（概況）

淡水・汽水・海産軟体動物については、全県的に分布が確認（報告準備中・河野）されていないのが現状である。淡水産軟体動物の県内での分布については、阿部（1981）が26種を報告している。この種数は実際に県内に生息する種の数に近い値と思われる。汽水・海産軟体動物に関しては、徳島県（1988）において牟岐大島および穴喰町竹ヶ島周辺海域より海産25種が報告され、徳島県版レッドデータブック（2001；河野，2001）（以下「県版RDB」という。）では汽水・海産10種が掲載されている。これら以外の断片的な報告を集めると2004年現在で県内での分布が確認されている種数は汽水産で6科11種（精査すれば2～3種増加の見込み）、淡水産で15科31種、海産で822種（途中集計数）にのぼり2006年末の集計では凡そ1,000種となる。しかし、これらの値は実際に生息分布する種の下回る値であり、2004年の集計では上記の種数に落ち着くと思われる。河野の調査では汽水産・淡水産を除いての海産種は海岸に生息する種についてのいわゆる海岸から浅海までの調査についてのみの調査に限られているからである。（表3-3-22）。

表3-3-22 本県で分布が確認されている淡水・汽水・海産貝類の種数ならびに推定数

|     | 確認種数 | 推定種数   |
|-----|------|--------|
| 淡水産 | 31   | 約30    |
| 汽水産 | 11   | 約15    |
| 海産  | 822  | 約1,000 |

列島改造論がとり沙汰されて以後、農業振興あるいは水産業振興のもと道路の新設・海水防止のための樋門の設置等が行われ、それに伴い地域的に絶滅する種が出てきている。また、生活排水等による環境汚染により海水・汽水域から消え去ろうとしている種もある。今後は詳細な生息実態を調査する必要がある。

以下、特に環境の悪化の影響を受けている種の現状について述べる。

#### ア 汽水産貝類

汽水域に生息するフトヘナタリ、カワアイ、ヘナタリは、圃場整備（生産目的）のための樋門設置、都市計画一環の道路や水路の整備、河口の整備、埋め立てなどに伴う環境変化により個体数が激減している。これらに関する工事を行う場合は環境への十分な配慮が望まれる。

ヒロクチカノコは内湾、河口の砂泥あるいは湾導や干潟に生息するが、護岸あるいは河畔工事等による環境悪化（自然を人工化）の影響を強く受け、個体数が減っているものと思われる。

イシマキガイは海水域から河川の淡水域まで生息する種であるが、河川の改修工事や埋め立てによる環境悪化により個体数が減少していると思われる。

#### イ 海産貝類

イボウミニナ及びウミニナは浅海の潮間帯上部の砂底の水面下で生活する貝類であるが、生活雑排水等による水質悪化により、戦後急速に個体数が減り、地域によっては絶滅に追い込まれたところもある。

コゲツノブエはホソウミニナ、イボウミニナよりもより水深の深い所に生息しており、本県の場合には潮間帯では混棲しているが、埋め立てによる被害と水質悪化により個体数が減っていると推測される。

ホラガイはオニヒトデを主たる餌としている大型巻貝で、珊瑚礁と切り離せない生態系の関係で生息する。希少な種であり、潜水での漁獲は禁止されている。が、美麗で大型ということで漁師はもとよりスキューバダイビング等の潜水者も密かに持ち帰るようである。牟岐大島を漁場とするイセエビ

捕獲漁師の間では網にかかったホラガイは、持ち帰りその蓋を火であぶり子女の出産の男女占いに古来から用いたと聞く。今後は漁獲の禁止を周知徹底する必要がある。

アカニシは他府県においても個体数が激減し希少種として扱われているところもある。内湾域に局所的に生息し、県下では特に河口域で見られる種である。近年、船底塗布や魚網塗料に混入して用いられるブチル・スズやトリブチル・スズによる不妊化が問題となっている。

## (2) 今後の課題

RDB掲載種の保全については特に配慮されるべきである。RDB掲載種が開発工事区内に生息する場合は、保全のための適切な処置をほどこすことが必要である。

生息地を埋め立てたり浚渫することはその生息地の集団を絶滅させることにつながる。貝類は環境の微妙な変化に敏感であるために、工事区域内に生息している個体を別の生息可能と思われる場所に移動させても、そこでうまく生存するとは限らない。

---

### <参考・引用文献>

- ・阿部近一．1981．徳島県陸産ならびに淡水産貝類誌．教育出版センター，徳島．
- ・環境省自然環境局生物多様性センター，2002，生物多様性調査 動物分布調査報告書(上) (陸産及び淡水産貝類) 2分冊の1．
- ・環境省自然環境局生物多様性センター，2002，生物多様性調査 動物分布調査報告書(下) (陸産及び淡水産貝類) 2分冊の2．
- ・河野圭典．2001．貝類 (淡水・汽水・海産貝類) ．徳島県の絶滅のおそれのある野生生物 (徳島県環境生活部，徳島)．
- ・紀平 肇，2003．日本産淡水貝類図鑑①．琵琶湖・淀川産の淡水貝類，ピーシーズ．
- ・久保弘文，1995．日本の希少な野生生物に関する基礎資料 (Ⅱ) ホラガイ．日本水産資源保護協会 (水産庁委託) 希少水生生物保存対策試験事業．
- ・徳島県．1988．徳島県自然保護調査研究事業報告．阿波竹ヶ島海中公園地区および阿波大島海中公園地区の海中生物．
- ・西脇三郎，1996．日本の希少な野生生物に関する基礎資料 (Ⅲ) イシマキガイ．日本水産資源保護協会 (水産庁委託) 希少水生生物保存対策試験事業．
- ・長谷川和範，1996．日本の希少な野生生物に関する基礎資料 (Ⅲ) アカニシ．日本水産資源保護協会 (水産庁委託) 希少水性生物保存対策試験事業．
- ・堀口敏広，1994，Imposexによる新腹足類絶滅の危機—有機スズ化合物による腹足類のimposex —，貝類学雑誌 (Venus)，53(2):158—159．
- ・徳島県版レッドデータブック掲載種選定作業委員会，2002，徳島県の絶滅のおそれのある野生生物—動物編—徳島県版レッドデータブック [普及版] 徳島県県民環境部環境局循環型社会推進課自然共生室．
- ・花輪伸一・佐久間浩子，1996．WWF Japanサイエンス レポート 第3巻，世界自然保護基金日本委員会．